〈編集後記〉

雑種タンポポの報に接して

原著「セイヨウタンポポが危ない？」　カンサイタンポポがセイヨウタンポポに押されて絶滅しかかっていると信じて来た。実際はそうではないらしい。セイヨウタンポポは絶滅の恐れのある稀少種で，カンサイタンポポにあらずしてセイヨウタンポポにもあらず，雑種タンポポがはびこっているのが現実の姿らしい。これは脅威的な発見だ。この貴重なオリジナルデータが，KONC に掲載されることとなった。これは長年にわたりデータを蓄積された，愛知教育大学芹沢俊介教授を核とする研究グループの勝利であり，ささやかではあったとしても KONC 研究助成の勝利でもあり，長い間 KONC の成長にご支援頂いた本機構維持会員の誇りに満ちた勝利でもある。ともに喜びを分かち合いたい。会誌のバックナンバーが枯渇することを願いたい。侵入者セイヨウタンポポは，果たして保全の対象と成り得るか？

特集記事「湿地の保全」　本号では特集記事に公開シンポジウム「中池見湿原の保全」の記録を取り上げた。このシンポジウムは KONC が企画し，梅雨空の合間をぬって偶然に訪れた晴れの日，1997年6月1日の京都で開催された。KONC 会員諸子を始め，多くの方々のご参加を得て，シンポジウムは盛会裏に幕を閉じた。忙しい時間を割いてシンポジウムでの御講演と原稿執筆の労を賜ったオーガナイザーと演者の先生方，菅沼孝之，杉山恵一，森本幸裕，河野昭一，角野康郎の諸先生に感謝します。

シンポジウムの主題となった中池見湿地は，わが国の農村の原風景ともいえる湿田である。湿田が耕作によって維持される二次的自然であるが故に，農業破壊が加速度的に進行する昨今のわが国では，その保全に多くの困難がつきまとう。その困難さにおいて，人跡稀な原生的自然の保全よりも，はるかに困難であるかも知れない。湿田を含む湿地全体の絶対面積が稀少となっている現在，そこを固有のすみかとする生物は，全て絶滅危惧種である。従って，その開発と保全の方策は論争とならざるを得ない。中池見の湿田開発は，私が足繁く通っているサラワクの，残り少ない熱帯雨林を焼き畑地やアブラヤシ園に開発する私的イメージと重なる。人が生き，水と森が死ぬことがこれまでの歴史であった。人類はそれほど愚かでは無いことを信じたいので，良い解決策が生み出されることを願っている。

報告　本機構の重鎮である村田源先生の近畿地方絶滅植物解説シリーズは，本号で第3報をむかえる。本機構の事業として企画された「レッドデータブック近畿（植物編）」の補足を意図して開始された本シリーズの，息長い継続にご支援を賜りたい。レッドデータブックの別企画として鳥類編が近々出版予定であり，将来的には鳥類編の解説記事も本会報に掲載されることを期待している。本機構の常連執筆者である布谷知夫，四手井綱英両先生には，絶滅危惧種の保全に関する両氏の活動記録をご寄稿頂いた。最近，琉球大学に移籍された萩原秋男先生には，わが国の生物多様性の結節点とも言える沖縄地方からの，フレッシュなレポートを頂いた。彼の地の自然保護に思いを馳せると共に，先生のご活躍を期待する。

表紙の言葉　京都大学今福道夫先生にご拝借をお願いした，ヤドカリの貴重な生態写真が表紙を飾っている。撮影の経緯については先生の直々の解説に譲るとして，今回もカラー写真で表紙を印刷できたことは，維持会員の皆様方のご支援の賜である。ヤドカリの絶滅危惧はあまり話題になっていないようであるが，日本各地をあまねく覆う野生生物の棲み場所の破壊と水質汚染は，湿田の生物の絶滅危惧と同じくヤドカリの生存をも圧迫しているように思えてならない。　（山倉拓夫）